保育計画成果報告書

法人名等	社会福祉法人　博愛社
施設名	幼保連携型認定こども園　博愛社こども園
報告者（役職）	田林　敬子（保育教諭 ）
住所・連絡先	大阪市淀川区十三元今里 3-1-72
	☎　　０６-６３０２-３４０５ E-mail　kodomoen@hakuaisha.com

〇タイトル（保育計画）

ビオトープ大改造!!

〇主な助成備品

太陽光発電パネル（水の循環機能）

１．保育計画策定の目的

2019 年 10 月より幼稚園と保育園が合併し、幼保連携型認定こども園博愛社こども園として新築の園舎で開園する。園舎を建てかえるにあたり、子ども達が遊びの中から、気づく・興味を持つ・発見・調べる・聞く・共感する・教え合うなどの育ちの学びが出来る環境を想い、以前からの木々を残し、築山や池のあるビオトープのある園庭になった。

ところが 2020 年度の夏に水温は上がり藻が大発生、藻を手作業で摘み取っても追いつかず、水中に沈み、底がヘドロ化していく。冬には池の水が濁り始め、メダカの環境が悪くなっていることに気が付く。池の整備に知識がなかったことを反省し、専門家に相談、水循環が機能していないことが問題とわかる。そこで、園の建築士に太陽光発電を活用した電動ポンプで水循環を促すシステムを導入する案を頂く。

ビオトープで『自然生態系ピラミッド』を教職員も学び、子ども達が自然の生き物の大切さを感じ、感性や意欲の向上・心の豊かさが日々の中で育つように教育・保育を実践していく。

２．具体的な実施内容

2021 年 2 月に太陽光パネル設置と水の循環設備の工事を行う。同時に池の周りの芝生の植え替えをした。『ビオトープ大改造！』に向けて走り出す。

＜以前＞

水は濁り、メダカも減る。

＜工事中＞

＜整備＞

専門家に整備の仕方を教えて頂く。

教職員が池の底のヘドロ化した泥をすくい、石を洗って池に戻すを繰り返し、環境の再構築を行う。専門家にも定期的に来ていただき指導をうける。

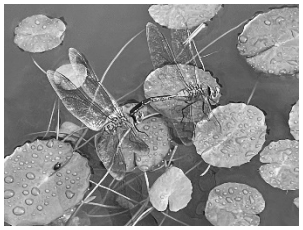
日々、藻をとり、水を循環させるうちに水が澄んでくる。

循環により水が出る。

３．その成果と評価

＜成果＞

4 月にはメダカやエビの姿が見られるようになる。大きな石にタニシもつくようになった。夏前にはたくさんのメダカが泳ぐようになり、お盆をすぎるとトンボが飛んで、ヤゴを発見出来るようになる。



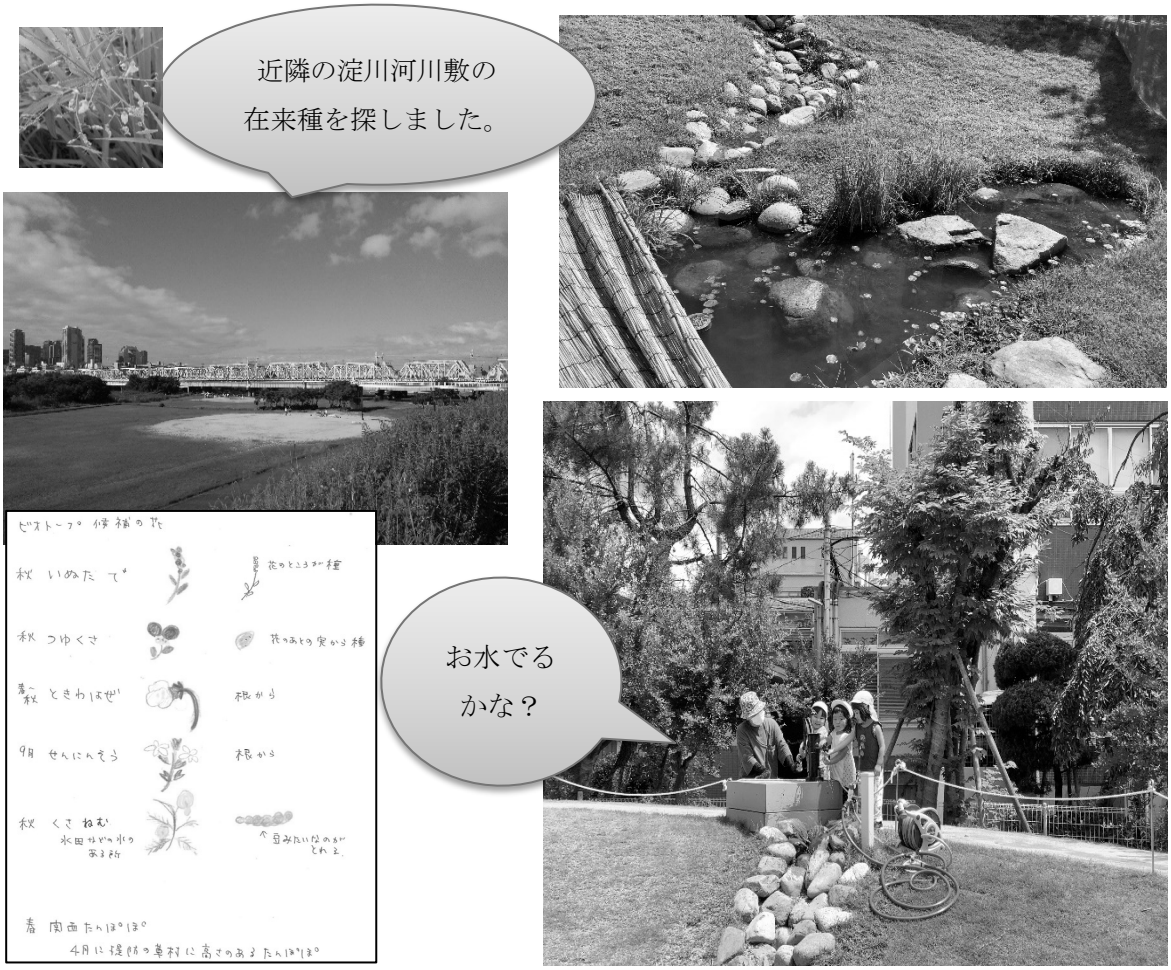
＜結果＞
メダカ・えび・タニシ・ヤゴと生き物が育った。メダカは微生物や藻を食べて、植物はメダカの排泄物で育つ。タニシは増えすぎた藻を食べる。トンボが卵を産みにくる。ヤゴはメダカを食べて大きくなりトンボになる。生態系が成立している環境となった。
＜評価＞
０・１・２歳児の子ども達は池をのぞいて、目を輝かせいろんな発見をして、保育教諭と「メダカいたね」と共感し、温かい空気観を味わうことが出来た。
３・４歳児は興味深々、捕まえたくて足が池につかってしまう子どももいる。メダカの動きをじっと見たり、跳んでくる虫に喜んだり、捕まえたりして友達同士で盛り上がる姿も見られ、探索心や友達との絆が深まっている。
５歳児（年長組）は池を除いてメダカを観察したり、まわりの虫に気づき「何やろ？」と捕まえていた。保育室でもめだかを飼育して、メダカの絵本や図鑑などで調べたり「すいちゃん」と親しみをもつ。「観察したら池に返してあげるねん」とも言う。子ども達の探求心や生き物を大切にする心は育っていると感じられる。ビオトープでの活動は SDGs14『海の豊かさ』15『緑の豊かさも守ろう」に該当することの話をする。地球環境を考える機会となった。

４．今後の課題と展望

今後も教職員中心に池の中の砂や藻をとり環境を整える。地域の在来種の植物を守る活動も行っていきたい。教職員自身が植物や生き物や『自然生態系ピラミッド』に興味をもって学んでいく。年長児が自主的にビオトープの整備が出来るような教育的な働きかけをもっとしていきたい。

コロナウイルス感染症が落ち着いたら、市の自然博物館の職員と淀川の堤防に植物観察にいったり、講師としてお話していただく機会をつくり、子ども達の学びの力になる活動を広げていく。

そして、何よりも子ども達と「めだかちゃん、かわいいね」と笑いあえる温かい時間を、大切にしていきたい。



以上